●論壇

衣食住と交通

Food, Clothing, Housing and Traffic

八十島義之助*

「衣食住」と、われわれはよく口にする。生活の最も基礎となる条件、とこれを広辞苑は定義しており、全くのところ、衣食住に頭を悩まされない人はどこにもいない。

勤め人ぐらしのわたしなど、比較的のんびりしていられたはずではあるが、それでも通り越してきた第二次世界大戦終戦前後の「食」を思いおこすと、今でもゾッとする。かゆでなくてはサマにならないほど少ない配給の米、そのかゆも、ついには全く塩が手に入らず、まさに味けなくなってしまった食物。そしてそれさえ途切れる。一時は、先の見通しが全くたたなかった。

当時、都会生活をした多くの人が共通に味わったこのような体験は、まだ良い方かも知れないが、その「食」をはじめとして、「衣」も「住」も、これだけはなんとかしなくては、という意味で、まさに生活の基礎条件に値する。

一方、人類には、その発祥以来無縁でなかった条件がもうひとつあったはずである。それは「移動」するということである。「交通」とは人や物の移動群をさす云々と、わたしはよく定義するが、そうならば人類は「交通」とともに進歩したといってもよい。とにかく、狩猟に行くにも人は山野を「移動」したし、隣の集落と物々交換をするにも「移動」を行なった。そのような最も原始的な生活様式の中にも付きまとっていた「移動」が、時代とともに次第に濃密になって、今日のように、地球上を網の目をかぶせて駆けめぐるような交通像ができ上がったのである。

もしも今日、あらゆる「交通」が突如として停止したとしたらどうなるであろうか。地球上の経済生活も、文化的蓄積も、一挙に崩壊してしまう。原始時代よりもはるかに複雑な交通体系の上に築かれている今日の人類の日常生活は、それだけに、簡単に破滅に瀕してしまうのではなかろうか。

さらに複雑なことには、「衣食住」そのものが、「交通」によって支えられている面もあることである。大都市の勤め人が、はるか遠隔地に住居をかまえていることがある。そこに行かなくては家を建てるための土地が見つからないからやむを得ないとはいうものの、そのような遠隔地からでも通勤可能であればこそのことであり、言ってみれば、「交通」が「住」の欠陥を補っているかにさえ見える。

これらを考えてみると、「交通」あるいは「移動」は、生活の基礎条件として見るときは、「衣食住」とならび称しても決しておかしくないものとなってくる。

ひるがえって「衣食住」をふり返ると、それなりにわれわれの関心も古く、かつ深かった。少なくとも、形而下の生活を維持するのに絶対的に必要なこれらについて、まず、シビルミニマム的に考えられ、公的な配給制度が設けられれば、まず、これらが対象として取上げられていた。こうして、必要条件さえ満たせばよさそうなものにもかかわらず、一方では、よりよい「衣食住」を求めて、人間は長い間いろいろな工夫をこらしてきた。

さまざまなぜいたくも行なわれるようになった。「衣食住」の文化も生まれ、もろもろの技術が派生したのも、そのような背景からであろう。

「衣食住」の安全については特に深い関心が払われていた。風邪をひかないように絶えず調節ができるような衣服、ばい菌や毒素の侵入を防ぐような食物の選択と調理法、地震の際の倒壊から免れるための建築方法などなど、いずれも、「衣食住」をいかに安全なものにするかのための

対策であり、それらを解明する学問研究も高度に発展するに至っている。

それならば「交通」についてはどうであろうか。「衣食住」にならび称せられるならば、それと並行して「交通」にもシビルミニマムがあり、ぜいたくがあり、文化があり、技術があってよいはずである。そして、確かに、そのようなものが備わっている。または、備わりつつあるといってよいかも知れない。

世界一周をするのに、わざわざ時間のかかる豪華船に乗ったり、たかがＳＬ一台のために、大勢のカメラマンが山の中まで出かけたりするのは、交通を単にその最低限の必要性だけで追求するものではないからにほかならない。

しかし、それならばすべてが同じレベルになっているであろうか。「衣食住」にくらべると、「交通」はまだ一歩も二歩も遅れているように見える。最近、とみに関心が高まっている交通安全も、伝染病や、住宅の日照・通風・換気に対する研究にくらべると、いまだ緒についただけ、といわざるを得まい。

つまり、研究対象としての「交通」の重要性は以上のようなところにあり、また進めるべき研究もいまだ広く、かつ深いということになる。

わたしは専攻を「交通」に選んでから久しい。没頭しているときは、すべてを忘れてそれにとりかかるが、はて何のために、と考えるときもある。そこで得た答の基には、上述のような考え方が潜んでいるといってよいであろう。

* Yoshinosuke YASOSHIMA　東京大学工学部教授